

新しい世界に

入学

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。学長の郡司隆男と言います。大学を代表して一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。生憎の雨模様の天気となってしまいましたが、皆さんの心の中はきっと晴れ晴れとして元気いっぱいなのではないかと思えます。

今年は、すでに年のはじめから言われているように、阪神淡路大震災が起こってから 20 年目という節目を迎えました。皆さんの多くは、そのときはまだ生まれていなかったかもしれませんが、その 2、3 年後という、まだ震災の記憶が生々しく残る中で生まれて、育てられるという経験をしてきました。

特に、神戸・阪神地区でお子さまを育てられた保護者の方々は、混乱の中で、かなり大変な思いをして、子育てにあられたのではないかと思います。今日、こうして、入学式を迎えることができるまでに育て上げられたということに、大学としても敬意を表したいと思えます。

大学都市神戸の多様性

ここ神戸は、今では、震災以前のにぎわいを取り戻していると言ってもよいと思えます。神戸で生まれ育った人も、あるいは大学生になって初めて神戸で暮らすことになった人も、神戸の多様性というものを楽しんでいただきたいと思います。

神戸は、山と海の両方の自然に恵まれ、異人館などの西欧文化も、南京町などのアジア系の文化も楽しむことができます。このような多様性にあふれた神戸市には、また、京都市に次いで多い数の大学がありますので、他大学の学生たちと親しくなる機会も多いのではないかと思います。

高校と大学との違い

今日からの大学生活に、皆さんはいろいろな期待をもっていると思いますが、大学は、今までの、高校までの学生生活といろいろな点で違ってきます。例えば、朝何時から始まるかということも、人によって違います。時間割が一人一人違うからです。

教室も、自分がとる授業によって変わります。はじめのうちは、教室の番号と建物の位置の関係がよくわからなくて戸惑うかもしれません。しばらく、キャンパスのあちこちに掲示を出しておきますので、教室を間違えないように、授業に遅刻しないように、しっかりとキャンパスの地図を頭に入れておいてほしいと思えます。

このような細かいことばかりでなく、もっと大きな違いがあります。それは、大学を卒業したら、多くの人は、それで学生生活が終わり、社会に出ていくということです。その意味で、大学というのは、学生から社会人になる過程での最後の境界のようなものだと言えることができるでしょう。

松蔭という学校

神戸松蔭女子学院大学は、123年前にイギリスから来た宣教師によって作られた女子教育のための学校が基になっています。宣教師ですから、キリスト教の布教という目的もあったでしょうが、興味深いのは、学校の名前に、とても日本的な「松」というものをもってきたということです。このことが象徴しているように、日本的な考え方と西欧の考え方のどちらも大事だと考えていたと思われまます。はじめに教えた科目が、英語と、それから裁縫（と言っても和裁）だったということもその一つのあらわれかと思えます。

新しいぶどう酒と古い皮袋

キリスト教の精神によって作られた学校ですから、キリスト教の愛の精神は、松蔭という学校で大事にされてきています。キリスト教の聖書（新約聖書）の中に、キリスト教を作ったイエス・キリストの生涯を記録した福音書といわれるものが4つあります。その福音書のいくつかに「新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない」ということが書かれています。

この、ぶどう酒（つまりワイン）と皮袋の話は結構有名なので、聞いたことのある人もいられるかもしれません。福音書では、それに続いて、「新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである」と結論づけられます。その理由は、新しいぶどう酒は、まだ発酵が続いているので、泡が出てきて皮袋がふくれ上がり、古い皮袋だと、破れてしまうからです。

当時は、今のように、ワインを濾過して酵母を取りのぞいて、それから瓶につめて、しっかり栓をするということがおこなわれておらず、そのまま皮の袋に入れていたので、このような喩え話が作られたそうなのですが、さて、何の喩えでしょうか。

一般には「古い皮袋」は伝統的なしきたり、「新しいぶどう酒」はイエスの教えとされているようですが、今日は、大学に入学したばかりの皆さんをこの話にあてはめてみようと思えます。考えてみると、2通りの喩えができると思えます。

第一の喩え

一つは、皆さんを「新しいぶどう酒」とすること。これはわかりやすいと思うのですが、すると、皆さんが「発酵途中」だということになります。ちょっと失礼な感じがしないでもないのですが、ぐんぐん伸びていく、これからいくらでも伸びていく、成長していくという意味では、「発酵」というのもよい考え方ではないかと思えます。

そうすると、「皮袋」は大学ということになります。皆さんを受け入れる大学が古くさい考え方のままで、いつも上から目線で、伝統的な考え方を押しつけるようなものであったら、それは「古い皮袋」です。やがて、皆さんの若いパワーに負けて、破れてしまう、つまり、大学が崩壊してしまいます。大学は「新しい皮袋」を目ざさないとはいけません。

最近の大学は、授業のやり方はもちろん、教室の設備をとっても、大きく変わりつつあります。教科書を読むだけ、あるいは、あらかじめ用意してきたノートを黒板に書き写すだけというような古くさいイメージの授業では、すまされません。教員の方もいろいろと工夫をこらした授業をやろうと心掛けていますので、どうか、期待をもって教室に来て下さい。

もう一つの喩え

さて、もう一つの喩えですが、これは、皆さんを「新しい皮袋」とすることです。なぜ、新しい皮袋には、発酵途中の新しいぶどう酒を入れても破れないかというと、新しい皮は伸びることができるからです。今日入学したばかりの皆さんも新しい皮袋のように大きな伸びしろをもっています。高校までの成績とは関係なく、大学に入って大きく伸びる人はおおぜいいます。それは、大学で学ぶことは、高校までの、ある意味で受験をターゲットにした、型にはまった勉強とはかなり違うからです。

はじめに、大学では時間割が一人一人違うということを言いました。学科が違えばあたりまえのことですが、たとえ同じ学科にいても、皆と同じ授業をとらなくてはならないのではなくて、自分で学ぶべきことを組み立てていきます。

いくつかの学科では「科目群」という形で、セットでとることを前提にしている授業科目も用意されていますので、今週のオリエンテーションのときによく説明をきいて、とりたい科目群、科目の組み合わせのイメージをしっかりと作って行って下さい。

大学は、「新しい皮袋」である皆さんに注ぎこむ「新しいぶどう酒」を用意します。もちろん、未成年の人がほとんどですから、本物のお酒を用意することはできませんが、新しい考え方、物の考え方を注いでいきたいと思えます。

特に大事なものは、こちらから既存の知識を教えこむのではなく、皆さんが自分で考えながら問題を解決することができるようになる力をつけることです。既存の知識はやがて古くなり、すたれます。古いぶどう酒になってしまいます。それよりは、皆さんにぶどうの育て方を教えたい。自分で、その都度、新しいぶどう酒が作れる力をつけたいと思っています。

A Whole New World

今まで、ぶどう酒や皮袋の喩えで「新しい」ということについて話してきました。ここで、一つ、関連する英語の歌を紹介したいと思います。ディズニー映画です。と言うと、去年の『アナと雪の女王』の Let It Go だと思いかもかもしれませんが、それについては後で触れるとして、まず紹介したいのは、1992年、今から23年も前に公開された『アラジン』という映画の中の A Whole New World という歌です。ジャスミンがアラジンと一緒に空飛ぶ絨毯に乗って、空の上からデュエットで歌う歌で、DVDなどで、ご覧になっている方もいるのではないかと思います。

A Whole New World というタイトルは、そのものずばり「全く新しい世界」ということです。歌詞をかいつままで日本語で紹介すると、アラジンがジャスミンに「光輝くすばらしい世界を見せてあげよう」と言います。「目を開かせて、絨毯の、上も、横も、下も、見せてあげよう。新しい視点をもって、人から命令されず、夢を実現するのだ」と続けます。すると、ジャスミンが「今まで全く知らなかった世界だけど、こんなに高いところから眺めると、a whole new world (全く新しい世界) にあなたと一緒にいることがよくわかる。もう昔には戻れないわ」と答えます。

これは、今まで宮殿の外に出たことがなかったお姫様であるジャスミンに、アラジンが、外の世界を見せてあげるということですが、空飛ぶ絨毯を使うということがポイントです。より高い視点から外の世界を見ることによって、物事をより広く見ることができます。このような視点を a new fantastic point of view (新しい素晴らしい視点) と歌の中では言って

います。

これは、お姫様でなくても、大事な視点だと思います。皆さんも、できるだけ、高い位置から、できるだけ広く世界を見るように心掛けて下さい。最後の方で、「新しい地平線を追いかけて、時間はたっぷりあるから、二人でこの whole new world (全く新しい世界) を分かち合しましょう」という部分が繰り返されます。

皆さんにとって、この大学が a whole new world (全く新しい世界) となることを期待します。大学には空飛ぶ絨毯は用意できませんので、文字通り空から世界を眺めてもらうということはできませんが、考え方、視点ということでは、できるだけ、高い位置に皆さんを運び上げたいと思っています。

Let It Go

最後に、さっき触れた、同じディズニー映画の『アナと雪の女王』の中の、大ヒットした Let It Go について簡単に触れておきたいと思います。この歌は日本語でも「ありのままに」というタイトルで歌われているので、よく知っていると思いますが、日本語の歌詞は、同じ時間で歌えるように、かつ、アニメーションの口の形に合わせて自然に聞こえるように作られているので、必ずしも原語に忠実な訳とはなっていません。今日は、元の英語の歌詞について説明したいと思います。

この歌は、映画のはじめの方、30分くらいのところで出てきて、エルザが雪山の中に城を作って引きこもるところで歌われます。そこで一つの決心が語られるのですが、それが、let it go、直訳すると、「『それ』を隠さない」ということになります。これは、「ありのままに」という、一見優等生的な考え方ではなく、もっと強く、自分のもつ、何でも凍らせてしまう特殊な能力を隠さない、もう、手袋をして「いい子」のふりをするのはやめよう、という、ある意味、開き直りの歌ということになります。

その後は、アナとエルザの姉妹が力を合わせてハッピーエンドに至るわけですが、この映画は、今までの伝統的なディズニー映画の、王子様を待つプリンセスという主人公と大きく違い、二人の姉妹の、男に頼らない強さが描かれています。Let It Go の歌の中にも、「自分がどこまでやれるか試して見る、私をしばるものはない、私は自由よ！」という部分があります。

女子大は自由！

エルザのように、何でも凍らせてしまうのは困りますが、皆さんも、せつかく女子大に入ったのですから、「私は自由よ！」と思って、これからの大学生活を満喫して下さい。男子に頼らず、女子だけでどこまでできるか、勉強に限らず、クラブ、ボランティア活動、ゼミなど、誰でもリーダーになって活躍できるチャンスがあります。

これからの大学・大学院生活が、皆さんにとっての全く新しい世界であり、新しいぶどう酒、新しい皮袋となっていくことを期待したいと思います。どうぞ頑張って下さい。もう一度、おめでとうございます。